表 9-8　性別・長子年齢別　多重比較－「子どもの気持ちや考えを理解しようとすること」

	平均値	12 歳以下男性	9 歳以下男性	12 歳以下女性	6 歳以下男性	2 歳以下男性	9 歳以下女性	6 歳以下女性	2 歳以下女性
12 歳以下男性	3.12				*	*	*	*	*
9 歳以下男性	3.33								*
12 歳以下女性	3.39								*
6 歳以下男性	3.40								*
2 歳以下男性	3.46								*
9 歳以下女性	3.47								
6 歳以下女性	3.49								
2 歳以下女性	3.64								

Tukey HSD　* p < .05

(F=5.581　p<.001　R2=.033　adj-R2 = .027)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

「子どもが希望するまでは何もしないでおくこと」も性別・長子年齢別の変数との間に統計的に有意な関連があった。多重比較の結果、長子が 0-2 歳の女性と長子が 7-9 歳の男性の間にその違いがみられた（表 9-9）

表 9-9　性別・長子年齢別　多重比較－「子どもが希望するまでは何もしないでおくこと」

	平均値	2 歳以下女性	6 歳以下女性	2 歳以下男性	6 歳以下女性	12 歳以下女性	6 歳以下男性	12 歳以下男性	9 歳以下男性
2 歳以下女性	1.79								*
6 歳以下女性	1.87								
2 歳以下男性	1.90								
6 歳以下女性	1.97								
12 歳以下女性	2.02								
6 歳以下男性	2.03								
12 歳以下男性	2.04								
9 歳以下男性	2.09								

Tukey HSD　* p < .05

(F=15.337　p<.001　R2=.085　adj-R2 = .079)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

虐待的養育態度「子どもを無視すること」は、概して男性に低く女性に高い（表 9-10)。多重比較を行うと、統計的に有意な違いがみられるのは、長子が 3-6 歳の女性、長子が 7-9 歳の女性と長子が 3-6 歳以外の男性回答者である。

表 9- 10　性別・長子年齢別　多重比較－「子どもを無視すること」

	平均値	9 歳以下男性	12 歳以下男性	2 歳以下男性	6 歳以下男性	12 歳以下女性	2 歳以下女性	9 歳以下女性	6 歳以下女性
9 歳以下男性	1.35							*	*
12 歳以下男性	1.37							*	*
2 歳以下男性	1.37							*	*
6 歳以下男性	1.46								
12 歳以下女性	1.50								
2 歳以下女性	1.55								
9 歳以下女性	1.63								
6 歳以下女性	1.66								

Tukey HSD　　* p < .05

(F=5.243　p<.001　R2=.031　adj-R2 = .025)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

同じく虐待的傾向にある養育態度「子どもが傷つくようなことを言うこと」は、概して子どもの年齢が高くなると、その頻度も高くなっている。多重比較の結果、長子が 0-2 歳の回答者の態度に性差はみられず、長子 0-2 歳の回答者よりもそれ以外の回答者の方が「子どもが傷つくようなことを言うこと」の頻度が高い(表 9-11)。長子が 3-6 歳の女性回答者、長子が 10-12 歳の女性回答者の頻度が最も高く、全ての男性回答者、長子が 0-2 歳の女性回答者との間に有意な違いがある。

表 9- 11　性別・長子年齢別　多重比較ー「子どもが傷つくようなことを言うこと」

	平均値	2歳以下男性	2歳以下女性	6歳以下男性	9歳以下男性	12歳以下男性	9歳以下女性	6歳以下女性	12歳以下女性
2歳以下男性	1.21			*	*	*	*	*	*
2歳以下女性	1.41			*	*	*	*	*	*
6歳以下男性	1.71							*	*
9歳以下男性	1.76							*	*
12歳以下男性	1.81							*	*
9歳以下女性	1.94								
6歳以下女性	1.99								
12歳以下女性	2.03								

Tukey HSD　* p < .05

(F=32.699　p<.001　R2=.165　adj-R2 = .160)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

虐待的傾向がある「手や体をたたいて叱ること」の多重比較の結果は、表 9-12 のとおりである。長子 3-6 歳の女性回答者がもっとも頻度が高く、他の全ての回答者と有意な違いがある。長子 7-9 歳の女性回答者は長子 0-2 歳の女性回答者との間に違いがみられる。

表 9- 12　性別・長子年齢別　多重比較ー「手や体をたたいて叱ること」

	平均値	2歳以下男性	12歳以下男性	12歳以下女性	9歳以下男性	2歳以下女性	6歳以下男性	9歳以下女性	6歳以下女性
2歳以下男性	1.66							*	*
12歳以下男性	1.72								*
12歳以下女性	1.80								*
9歳以下男性	1.83								*
2歳以下女性	1.86								*
6歳以下男性	1.92								*
9歳以下女性	2.00								*
6歳以下女性	2.32								

Tukey HSD　* p < .05

(F=12.430　p<.001　R2=.070　adj-R2 = .064)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

（2）地域による違い

子どもに対するしつけ・養育態度の地域差は、この分析においてはみられなかった（表9-13)。このことから、しつけや養育態度が全国的にほぼ共有されていることが考えられる。ただし、今回は都市規模を用いた分析であるため、厳密に言えば、しつけや養育態度の共有について分析が終わったことにはならない。関西、関東など、地方別の分析を行ってみる必要があるだろう。

表 9- 13　地域別　子どもに対してのしつけ・養育態度

	対話・受容的		自立促進・非統制的			虐待的傾向			
	話しかける	理解しようとする	物事を決めさせる	何もしないでおく	わがままを許す	無視する	傷つくようなことを言う	たたいて叱る	閉じこめたり、出す
全体	3.81	3.43	2.94	1.96	2.29	1.50	1.75	1.92	1.15
14 大市	3.83	3.49	2.91	1.87	2.33	1.52	1.72	1.87	1.12
10 万人以上の市	3.79	3.42	2.96	1.98	2.30	1.52	1.76	1.93	1.15
10 万人未満(町村含む)	3.83	3.40	2.94	1.99	2.26	1.47	1.76	1.95	1.17
N	1171	1167	1165	1169	1164	1171	1167	1170	1164
F	0.676	1.41	0.25	2.24	0.75	0.89	0.37	1.10	1.08
	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

（3）世帯構成による違い

しばしば虐待的傾向は、子育てにおいて孤立しやすい核家族で高いと言われることがあるが、この調査の分析の限りでは、世帯構成の違いによる差異はなかった（表 9-14)。その他のしつけ・養育態度においても、統計的に有意な違いはなかった。

表 9- 14　世帯構成別　子どもに対してのしつけ・養育態度

	対話・受容的		自立促進・非統制的			虐待的傾向			
	話しかける	理解しようとする	物事を決めさせる	何もしないでおく	わがままを許す	無視する	傷つくようなことを言う	たたいて叱る	閉じこめたり、出す
全体	3.81	3.43	2.94	1.96	2.29	1.50	1.75	1.92	1.15
核家族	3.81	3.43	2.92	1.95	2.29	1.49	1.74	1.93	1.15
三世代	3.84	3.43	3.00	1.98	2.30	1.54	1.80	1.89	1.16
N	1162	1158	1156	1149	1155	1162	1158	1161	1160
F	0.82	0.15	1.58	0.42	0.22	1.07	1.86	0.58	0.43
	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.

（4）階層による違い

ここでは世帯収入別、本人学歴別に子どもに対してのしつけ・養育態度について比較した。まず、世帯収入別に違いがみられたのは、対話的・受容的養育態度「理解しようとする」のみで、その他の項目については、世帯年収による有意な違いはなかった（表 9-15）。

表 9- 15　世帯収入別　子どもに対してのしつけ・養育態度

	対話・受容的		自立促進・非統制的			虐待的傾向			
	話しかける	理解しようとする	物事を決めさせる	何もしないでおく	わがままを許す	無視する	傷つくようなことを言う	たたいて叱る	閉じこめたり、出す
全体	3.81	3.43	2.94	1.95	2.30	1.51	1.76	1.91	1.15
400 万円未満	3.82	3.45	2.99	1.98	2.38	1.53	1.68	1.95	1.17
700 万円未満	3.80	3.37	2.92	1.95	2.29	1.54	1.77	1.95	1.15
700 万円以上	3.82	3.48	2.94	1.94	2.27	1.45	1.78	1.85	1.13
N	1092	1089	1056	1080	1085	1092	1089	1092	1090
F	0.28	2.88	0.51	0.13	1.52	2.12	1.52	2.01	0.61
	n. s.	p<.10	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.

「理解しようとすること」について、性別・世帯年収別に一元配置の分散分析を行い、多重比較したところ、世帯年収 400 万円以上 700 万円未満世帯の男性、世帯年収 700 万以上世帯の男性と、世帯年収 700 万以上世帯の女性との間に統計的に有意な違いがみられた（表 9-16)。700 万円以上の世帯では女性が「理解しようと」しているのに対し、男性にはその傾向が低いといえる。

表 9- 16　性別・世帯年収別　多重比較－「子どもの気持ちや考えを理解しようとすること」

	平均値	700 万円未満男性	700 万円以上男性	400 万円未満女性	700 万円未満男性	400 万円未満男性	700 万円以上女性
700 万円未満男性	3.29						*
700 万円以上男性	3.34						*
400 万円未満女性	3.41						
700 万円未満男性	3.43						
400 万円未満男性	3.51						
700 万円以上女性	3.61						

Tukey HSD　　* p < .05

(F=5.413　p<.001　R2=.024　adj-R2 = .020)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

次に本人の学歴別にしつけ・養育態度の違いをみる。しつけ・養育態度ともっとも関連のある長子年齢と本人の学歴との間には関連性はなかった（χ^2=6.326　n.s.)。したがって、学歴別のしつけ・養育態度も分析を行い、有意な違いがみられた項目について、性別・学歴別に分析した後、多重比較を行うこととする。

学歴による有意な違いがみられたのは、対話的・受容的養育態度「話しかける」、「理解しようとする」、虐待的傾向の「無視する」、「傷つくようなことを言う」、「たたいて叱る」の５項目である（表 9-17)。

表 9- 17　学歴別　子どもに対してのしつけ・養育態度

	対話・受容的		自立促進・非統制的			虐待的傾向			
	話しかける	理解しようとする	物事を決めさせる	何もしないでおく	わがままを許す	無視する	傷つくようなことを言う	たたいて叱る	閉じこめたり、出す
全体	3.81	3.43	2.94	1.95	2.29	1.51	1.75	1.92	1.15
中学・高校	3.77	3.37	2.99	1.97	2.29	1.53	1.78	1.96	1.17
短大・高専（専門学校含む）	3.89	3.48	2.94	1.93	2.31	1.55	1.80	1.96	1.15
大学・大学院	3.79	3.45	2.89	1.97	2.27	1.42	1.66	1.82	1.12
N	1164	1160	1158	1151	1157	1164	1160	1163	1162
F	7.07	2.71	1.20	0.27	0.30	3.78	4.43	3.64	1.62
	p<.001	p<.10	n.s.	n.s.	n.s.	p<.05	p<.05	p<.05	n.s.

この５項目について、さらに性別・学歴別の変数を用いて、分散分析を行い、多重比較の結果を以下の表 9-18 に示した。「子どもによく話しかけること」は、中学・高校の男性がそれ以外の全ての回答者に比べて低い。大学・大学院の男性は中学・高校の女性、短大・高専の女性よりも低い。女性回答者の中では、学歴による違いはなく、どの学歴でも女性の方が子どもに話しかける頻度が高いといえる。一方、男性は中学・高校の男性で極めて低く、ついで、大学・大学院の男性が低いことがわかる。

表 9- 18　性別・学歴別　多重比較ー「子どもによく話しかけること」

	平均値	中学・高校男性	大学・大学院男性	短大・高専男性	大学・大学院女性	中学・高校女性	短大・高専女性
中学・高校男性	3.62		*	*	*	*	*
大学・大学院男性	3.76					*	*
短大・高専男性	3.85						
大学・大学院女性	3.86						
中学・高校女性	3.89						
短大・高専女性	3.89						

Tukey HSD　　* p < .05

(F=12.285　p<.001　R2=.050　adj-R2 = .046)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

「子どもを理解しようとすること」では、男性と女性の比較では、男性が「子どもを理解しようとする」傾向が低く、学歴が高いものの方が低いものよりも「子どもを理解しようとする」傾向が高い。特に中学・高校の男性は短大・高専の女性、大学・大学院の女性よりも低い結果となっている（表 9-19)。

表 9- 19　性別・学歴別　多重比較－「子どもの気持ちや考えを理解しようとすること」

	平均値	中学・高校男性	短大・高専男性	大学・大学院男性	中学・高校女性	短大・高専女性	大学・大学院女性
中学・高校男性	3.28					*	*
短大・高専男性	3.36						
大学・大学院男性	3.39						
中学・高校女性	3.44						
短大・高専女性	3.51						
大学・大学院女性	3.59						

Tukey HSD　* p < .05

(F=3.894　p<.01　R2=.017　adj-R2 = .012)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

虐待的傾向である「子どもを無視すること」は、男性の方が女性よりも低く、特に、大学・大学院男性は全ての女性回答者よりも低く、短大・高専男性は短大・高専女性よりも低い（表 9-20)。

表 9- 20　性別・学歴別　多重比較－「子どもを無視すること」

	平均値	大学・大学院男性	短大・高専男性	中学・高校男性	大学・大学院女性	中学・高校女性	短大・高専女性
大学・大学院男性	1.35				*	*	*
短大・高専男性	1.36						*
中学・高校男性	1.45						
大学・大学院女性	1.59						
中学・高校女性	1.59						
短大・高専女性	1.59						

Tukey HSD　* p < .05

(F=6.033　p<.001　R2=.025　adj-R2 = .021)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

同じく虐待的傾向である「傷つくようなことを言うこと」も、女性の間に違いはなく、女性は概して高い（表 9-21）。男性は学歴により違いがあり、大学・大学院男性は全ての女性回答者よりも低く、短大・高専男性、中学・高校男性は短大・高専女性、中学・高校女性よりも低い。

表 9-21　性別・学歴別　多重比較－「子どもが傷つくようなことを言うこと」

	平均値	大学・大学院男性	短大・高専男性	中学・高校男性	大学・大学院女性	短大・高専女性	中学・高校女性
大学・大学院男性	1.58				*	*	*
短大・高専男性	1.58					*	*
中学・高校男性	1.65					*	*
大学・大学院女性	1.83						
短大・高専女性	1.85						
中学・高校女性	1.88						

Tukey HSD　＊ p < .05

(F=8.406　p<.001　R2=.035　adj-R2 = .031)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

表 9-22 によれば、「手や体をたたいて叱ること」は大学・大学院男性が全ての女性回答者よりも低いことがわかる。

表 9-22　性別・学歴別　多重比較－「手や体をたたいて叱ること」

	平均値	大学・大学院男性	短大・高専男性	中学・高校男性	大学・大学院女性	中学・高校女性	短大・高専女性
大学・大学院男性	1.72				*	*	*
短大・高専男性	1.84						
中学・高校男性	1.85						
大学・大学院女性	1.99						
中学・高校女性	2.04						
短大・高専女性	2.05						

Tukey HSD　＊ p < .05

(F=5.780　p<.001　R2=.024　adj-R2 = .020)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

（5）しつけ・養育態度に関するジェンダー構造

以上みてきたように、子どもの発達段階において親（回答者）のしつけ・養育態度は異なっているが、さらに性別による違いもみられ、その違いも調査項目によって異なっていた。

自分の気持ちを伝えられない乳幼児の時に、対話的・受容的しつけ・養育態度は高くなり、子ども自身が意志をもち、それを伝えられるような年齢になると、親（回答者）の自立促進的・非統制的しつけ・養育態度が高くなる。そして、子ども自身が意志をもち、それを伝えられるようになりはじめ、親が子どもを統制できなくなる 3-6 歳、7-9 歳の頃に、親（回答者）の虐待的傾向は強まる。

また、対話的・受容的しつけ・養育態度のような積極的な関わりを意味する項目は女性の方が高く、自立促進的・非統制的しつけ・養育態度のような、違う見方をすれば消極的なしつけ・養育態度と思われる項目は男性の方が高かった。虐待的傾向も、男性よりも女性の行為の頻度が高いのは、積極的な関わりと関連していると思われる。

男性と女性の子どものしつけや養育態度の違いは明らかであり、その違いに加えて、回答者の性別とその他の変数、長子年齢や学歴などとの関連でみた結果、女性の中での違いはなく、男性の中で違いがみられた。

男性間の違いを大まかにまとめると、長子年齢の高い男性、中学・高校男性の対話的・受容的しつけ・養育態度は低い。大学・大学院男性は、もっとも虐待的傾向が低い、といえる。これをみるならば、大学・大学院男性は女性としつけや養育態度は異なるが、父親として良い父親といえるのだろうか。

前述した子育てでの積極的関わりという意味で、長子との共同行動の変数を用いた。この変数は、「ふだん一緒に遊ぶ頻度」、「ふだん、知識や技能を教える頻度」、「ふだん、一緒に夕食をとる頻度」について、選択肢「ほぼ毎日（週５～７回）」を６点、「週に３～４回」を 3.5 点、「週に１～２回」を 1.5 点、「月に１～２回」を 0.375 点、「年に数回」を 0.05 点、「まったくない」を０点として数値化した。そして、長子との共同行動について性別・学歴別に分散分析を行った。

まず、「一緒に遊ぶこと」については、女性の間に違いはないが大学・大学院男性、短大・高専男性は全ての女性回答者よりも頻度が低い（表 9-23）。中学・高校男性は女性回答者との違いはみられない。

表 9- 23　性別・学歴別　多重比較－「長子と一緒に遊ぶこと」

	平均値	大学・大学院男性	中学・高校男性	短大・高専男性	中学・高校女性	短大・高専女性	大学・大学院女性
大学・大学院男性	2.56				*	*	*
短大・高専男性	2.74				*	*	*
中学・高校男性	3.20						
中学・高校女性	3.44						
短大・高専女性	3.72						
大学・大学院女性	4.15						

Tukey HSD　* p < .05

(F=12.922　p<.001　R2=.053　adj-R2 = .049)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

「教えること」は大学・大学院女性、短大・高専女性で最も多い。ここでは、めずらしく女性の間でも違いがみられ、大学・大学院女性、短大・高専女性は中学・高校女性よりも頻度が高い（表 9-24)。逆に男性間の違いはなく、全ての男性回答者は女性回答者よりも頻度が低い。

表 9- 24　性別・学歴別　多重比較－「長子に教えること」

	平均値	中学・高校男性	大学・大学院男性	短大・高専男性	中学・高校女性	短大・高専女性	大学・大学院女性
中学・高校男性	1.66				*	*	*
大学・大学院男性	1.69				*	*	*
短大・高専男性	1.72				*	*	*
中学・高校女性	2.75						*
短大・高専女性	3.09						
大学・大学院女性	3.66						

Tukey HSD　* p < .05

(F=27.208　p<.001　R2=.105　adj-R2 = .102)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

「一緒に夕食をとること」は、全ての男性回答者は全ての女性回答者よりも頻度が低いが、特に、大学・大学院男性は中学・高校男性よりも頻度が低い（表 9-25)。

表 9- 25　性別・学歴別　多重比較－「長子と一緒に夕食をとること」

	平均値	大学・大学院男性	短大・高専男性	中学・高校男性	大学・大学院女性	中学・高校女性	短大・高専女性
大学・大学院男性	3.23			*	*	*	*
短大・高専男性	3.78				*	*	*
中学・高校男性	3.84				*	*	*
中学・高校女性	5.58						
短大・高専女性	5.66						
大学・大学院女性	5.70						

Tukey HSD　　* p < .05

(F=92.214　p<.001　R2=.285　adj-R2 = .282)

注　表側・表頭は平均値の昇順。

（6）小括

ほぼ全ての女性が対話的・受容的な養育態度を持ち、子どもとのかかわりあいが深い一方で、虐待的な傾向も男性よりも高かった。男性は子どもとのかかわりあいが少なく、虐待的な傾向の少ない高学歴男性は、そもそも子どもとのかかわりあいが少なかった。男性の中で子どもとのかかわりあいを持っている低・中学歴男性は、かかわりあいがあるものの対話的・受容的な養育態度が相対的に乏しい。これらの分析結果の背景には、女性への子育ての偏りによる育児ストレス、高学歴男性の長時間労働による子育てへの参加の不足、女性には浸透している対話的・受容的子育ての重要さについて低・中学歴男性の学習不足などがあげられるかもしれない。今後さらにこれらの点について分析する価値があるだろう。

（永井暁子）

10章　子育て感のジェンダー差・世代差・階層差

（1）　問題意識

子産み・子育てにおけるプラス面の評価とマイナス面の評価を測る尺度を構成し、対象者の属性の違いによる、それらの評価の違いを捉えるとともに、それらの評価に影響する諸要因の違いのなかに、ジェンダー差や階層差を探ることをねらいとする。

（2）　子産み・子育てについての評価尺度の構成

本調査では、対象者一人一人の子産み・子育て意識を問うために、問 23 において、12 の項目を用意している。これらのなかには、子産み・子育てについてのプラスの評価、負担感についての評価が含まれている。子産み・子育てについてのプラス評価尺度とマイナス評価尺度を構成するにあたって、用意した質問項目が、プラス評価とマイナス評価それぞれに一次元になるかどうかを確認するために、因子分析を行うことにした。

技法として、主成分分析を用いて、バリマックス回転を行った。分析結果は、表 10-1 のとおりである。

表 10- 1　子産み・子育て意識の因子分析結果

子産み・子育て意識	第１因子	第２因子	第３因子
（カ）子育てを通じて人間的に成長できる	**0.789**	0.083	-0.005
（イ）子どもとのふれあいが楽しい	**0.778**	-0.087	-0.122
（ア）家族の結びつきが深まる	**0.742**	-0.034	-0.133
（ウ）仕事に、はりあいができる	**0.731**	-0.129	-0.092
（エ）親としての重い責任を感じる	**0.659**	0.199	-0.051
（オ）子育てを通じて自分の友人が増える	**0.640**	-0.021	0.156
（ク）子育てで出費がかさむ	0.037	**0.830**	-0.008
（ケ）自分の自由な時間がもてなくなる	-0.029	**0.760**	0.312
（キ）子育てによる心身の疲れが大きい	-0.021	**0.744**	0.308
（シ）社会から取り残されたような気になる	-0.051	0.103	**0.840**
（サ）子育てが大変なことを身近な人が理解してくれない	-0.115	0.200	**0.769**
（コ）仕事が十分にできなくなる	0.024	0.490	**0.638**
寄与率	26.464	18.198	16.375
累積寄与率	26.464	44.663	61.037
因子の解釈	子育てプラス感	子育て負担感	子育て孤立感

因子抽出法：主成分分析　　回転法：Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法
5 回の反復で回転が収束した。

因子分析の結果、上記のような３因子が析出された。第１因子においては、「子育てを通じて人間的に成長できる」、「子どもとのふれあいが楽しい」、「家族の結びつきが深まる」、「仕事に、はりあいができる」、「親としての重い責任を感じる」、「子育てを通じて自分の友人が増える」といった項目が、高い因子負荷量を示している。そこで、これらの特徴から、第１因子を「子育てプラス感」因子と解釈する。第２因子には、「子育てで出費がかさむ」、「自分の自由な時間がもれなくなる」、「子育てによる心身の疲れが大きい」の３項目

が高い因子負荷量を示している。そこで、第２因子を「子育て負担感」因子と解釈する。また、第３因子については、「社会から取り残されたような気になる」、「子育てが大変なことを身近な人が理解していれない」、「仕事が十分にできなくなる」の因子負荷量が高いことから、第３因子を「子育て孤立感」因子と解釈することにする。

子産み・子育て感について、当初は、プラス評価とマイナス評価という２区分を想定していたが、因子分析の結果、マイナス評価が、負担感と孤立感に、さらに２分されることが明らかになった。

（３）子育て評価のジェンダー差・世代差・子どもの有無の違い

性別、世代別、子どもの有無の違いなどによって、子育て評価が異なることは、すでに明らかになっている。

ここでは、前述の因子分析結果をもとにして、対象者ひとりひとりの子育て感を測定し、子育て感の性差、世代差、子どもの有無の違いを検討しよう。

まず、子育て感を測るにあたって、用意した項目の選択肢について、「そう思う」１点、「どちらかといえばそう思う」２点、「どちらかといえばそう思わない」３点、「そう思わない」４点として、子育てプラス感、子育て負担感、子育て孤立感の各因子に強く反応した項目への回答を加算して、子育てプラス感得点、子育て負担感得点、子育て孤立感得点とする。

子育てプラス感は、６点から２４点に分布し、得点の低いほど、子育てプラス感が高いことになる。子育て負担感は、３点から１２点に分布し、得点の低いほど、子育て負担感が高いことになる。同様に、子育て孤立感も３点から１２点に分布し、得点の低いほど、子育て孤立感が高いことになる。

対象者を、性別、世代別、子どもの有無別の３変数によって、８分類し、それら８グループについて、子育て感の平均値を求めて、そのうえで、８分類相互の多重比較を行うことにした。

表 10-2 は、対象者を８グループに区分して、グループごとの子育て感の平均値と標準偏差値を求めたものである。ちなみに、一元配置の分散分析を求めてみると、子育てプラス感、子育て負担感、子育て孤立感のいずれも $p<.001$ で、統計的な有意差が認められた。表 10-2 より、子育てプラス感については、28-37 歳の子どもありの女性が最も高く、38-47 歳の子どもなしの女性が最も低いことがわかる。子育て負担感については、28-37 歳の子ども無の女性が最も高く、38-47 歳の子ども有の男性が最も低く、また、子育て孤立感については、28-37 歳、38-47 歳の子ども無の女性が高く、28-37 歳、38-47 歳の子ども有の男性が低くなっている。

表 10- 2　グループごとの子育て感得点平均値と分散分析結果

対象者区分		子育てﾌﾟﾗｽ感	子育て負担感	子育て孤立感
28-37 歳・男性・子なし	平均値	9.3	5.7	9.5
	度数	241	241	242
	標準偏差	3.8	2.2	2.1
28-37 歳・女性・子なし	平均値	9.1	4.9	7.6
	度数	187	186	186
	標準偏差	3.3	1.6	1.9
38-47 歳・男性・子なし	平均値	9.9	6.2	9.4
	度数	94	94	93
	標準偏差	3.7	2.2	2.1
38-47 歳・女性・子なし	平均値	10.6	5.6	7.9
	度数	67	70	70
	標準偏差	4.2	2.0	2.1
28-37 歳・男性・子あり	平均値	8.6	6.9	10.5
	度数	277	277	278
	標準偏差	2.4	2.2	1.7
28-37 歳・女性・子あり	平均値	8.2	5.8	8.4
	度数	478	483	478
	標準偏差	2.3	2.0	2.2
38-47 歳・男性・子あり	平均値	8.7	7.2	10.2
	度数	453	453	452
	標準偏差	2.5	2.0	1.7
38-47 歳・女性・子あり	平均値	8.2	6.2	8.7
	度数	612	626	618
	標準偏差	2.5	2.1	2.2
合計	平均値	8.6	6.2	9.1
	度数	2409	2430	2417
	標準偏差	2.8	2.2	2.2
分散分析結果	F 値	14.410	35.262	74.315
	有意差	p<.000	p<.000	p<.000

もう少し、詳しくみてみよう。

そこで、８グループ相互の多重比較データをみることにする。表 10-3 から表 10-5 である。

まず、表 10-3 の子育てプラス感について検討する。

28-37 歳の子どもがいない人において、男女の間で、子育てプラス感に有意差はみられない。そして、28-37 歳の男性においては、子どもの有無に関わりなく子育てプラス感に有意差はみられないし、38-47 歳の子どものいる男性、いない男性との間にも子育てプラス感の有意差はみられない。

ところが、女性の場合、子どものいない女性の間で、28-37 歳と 38-47 歳との間で、子育てプラス感の有意差がみられて、38-47 歳の女性のほうが子育てプラス感が低いのである。のみならず、同世代の子どものいる女性との間でも子育てプラス感に有意差がみられて、こちらは、子どものいる女性のほうが子育てプラス感が高いのである。

他方、子どものいる人でみると、子育てプラス感は、男女差も世代差もみられない。

すなわち、子育てプラス感は、38-47 歳の子どものいない女性が最も低く、次いで、子どものいない男性と 28-37 歳の女性、そして、子育てプラス感が高いのは、子どものいる男女ということがわかる。

次に、表 10-4 の子育て負担感の多重比較データを検討しよう。

こちらも非常に興味深い傾向をみることができる。

すなわち、最も子育て負担感が高いのは、28-37 歳と 38-47 歳の子どものいない女性であり、同世代の子どものいない男性とも、同世代の子どものいる女性とも有意差がみられる。そして、28-37 歳と 38-47 歳の子どものいない男性と 28-37 歳と 38-47 歳の子どものいる女性が、子育て負担感において有意差がみられないのである。さらに、28-37 歳と 38-47 歳の子どものいる男性において、子育て負担感がもっとも低い傾向を読み取ることができる。

子育て負担感が、子どものいない女性で最も高く、子どものいる男性で最も低いという結果の解釈について、次節で、さらに検討する。

表 10-5 の子育て孤立感の多重比較データにおいても、子育て負担感とよく似た傾向を読み取ることができる。

最も子育て孤立感が高いのは、28-37 歳と 38-47 歳の子どものいない女性であり、子どものいる女性よりも高い傾向にある。次いで、子どものいる女性であり、世代差はみられない。その次が、子どものいない男性であり、世代差はみられない。そして、子育て孤立感が最も低いのが、子どものいる男性であり、世代差はみられない。

すなわち、子育て孤立感は、子どものいない女性、子どものいる女性、子どものいない男性、子どものいない男性の順に低くなる傾向を読み取ることができる。

表 10- 3　子育てプラス感の多重比較

従属変数: 子育てプラス感
Bonferroni

(I) 対象	(J) 対象	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間 下限	95% 信頼区間 上限
28-37歳・男性・子なし	28-37歳・女性・子なし	.28	.27	1.000	-.56	1.13
	38-47歳・男性・子なし	-.50	.34	1.000	-1.56	.56
	38-47歳・女性・子なし	-1.20*	.38	.049	-2.41	-2.E-03
	28-37歳・男性・子あり	.73	.25	.084	-4.E-02	1.49
	28-37歳・女性・子あり	1.18*	.22	.000	.49	1.87
	38-47歳・男性・子あり	.66	.22	.083	-3.E-02	1.35
	38-47歳・女性・子あり	1.18*	.21	.000	.52	1.84
28-37歳・女性・子なし	28-37歳・男性・子なし	-.28	.27	1.000	-1.13	.56
	38-47歳・男性・子なし	-.79	.35	.710	-1.89	.31
	38-47歳・女性・子なし	-1.49*	.40	.005	-2.73	-.25
	28-37歳・男性・子あり	.44	.26	1.000	-.38	1.27
	28-37歳・女性・子あり	.90*	.24	.005	.15	1.65
	38-47歳・男性・子あり	.38	.24	1.000	-.38	1.13
	38-47歳・女性・子あり	.89*	.23	.003	.17	1.62
38-47歳・男性・子なし	28-37歳・男性・子なし	.50	.34	1.000	-.56	1.56
	28-37歳・女性・子なし	.79	.35	.710	-.31	1.89
	38-47歳・女性・子なし	-.70	.44	1.000	-2.09	.69
	28-37歳・男性・子あり	1.23*	.33	.006	.19	2.27
	28-37歳・女性・子あり	1.68*	.31	.000	.70	2.67
	38-47歳・男性・子あり	1.16*	.32	.007	.18	2.15
	38-47歳・女性・子あり	1.68*	.31	.000	.72	2.64
38-47歳・女性・子なし	28-37歳・男性・子なし	1.20*	.38	.049	2.16E-03	2.41
	28-37歳・女性・子なし	1.49*	.40	.005	.25	2.73
	38-47歳・男性・子なし	.70	.44	1.000	-.69	2.09
	28-37歳・男性・子あり	1.93*	.38	.000	.75	3.12
	28-37歳・女性・子あり	2.38*	.36	.000	1.25	3.52
	38-47歳・男性・子あり	1.86*	.36	.000	.72	3.00
	38-47歳・女性・子あり	2.38*	.36	.000	1.26	3.50
28-37歳・男性・子あり	28-37歳・男性・子なし	-.73	.25	.084	-1.49	3.87E-02
	28-37歳・女性・子なし	-.44	.26	1.000	-1.27	.38
	38-47歳・男性・子なし	-1.23*	.33	.006	-2.27	-.19
	38-47歳・女性・子なし	-1.93*	.38	.000	-3.12	-.75
	28-37歳・女性・子あり	.45	.21	.866	-.20	1.11
	38-47歳・男性・子あり	-7.E-02	.21	1.000	-.73	.60
	38-47歳・女性・子あり	.45	.20	.707	-.18	1.08
28-37歳・女性・子あり	28-37歳・男性・子なし	-1.18*	.22	.000	-1.87	-.49
	28-37歳・女性・子なし	-.90*	.24	.005	-1.65	-.15
	38-47歳・男性・子なし	-1.68*	.31	.000	-2.67	-.70
	38-47歳・女性・子なし	-2.38*	.36	.000	-3.52	-1.25
	28-37歳・男性・子あり	-.45	.21	.866	-1.11	.20
	38-47歳・男性・子あり	-.52	.18	.120	-1.09	4.91E-02
	38-47歳・女性・子あり	-3.E-03	.17	1.000	-.53	.53
38-47歳・男性・子あり	28-37歳・男性・子なし	-.66	.22	.083	-1.35	3.38E-02
	28-37歳・女性・子なし	-.38	.24	1.000	-1.13	.38
	38-47歳・男性・子なし	-1.16*	.32	.007	-2.15	-.18
	38-47歳・女性・子なし	-1.86*	.36	.000	-3.00	-.72
	28-37歳・男性・子あり	6.78E-02	.21	1.000	-.60	.73
	28-37歳・女性・子あり	.52	.18	.120	-5.E-02	1.09
	38-47歳・女性・子あり	.52	.17	.074	-2.E-02	1.06
38-47歳・女性・子あり	28-37歳・男性・子なし	-1.18*	.21	.000	-1.84	-.52
	28-37歳・女性・子なし	-.89*	.23	.003	-1.62	-.17
	38-47歳・男性・子なし	-1.68*	.31	.000	-2.64	-.72
	38-47歳・女性・子なし	-2.38*	.36	.000	-3.50	-1.26
	28-37歳・男性・子あり	-.45	.20	.707	-1.08	.18
	28-37歳・女性・子あり	2.57E-03	.17	1.000	-.53	.53
	38-47歳・男性・子あり	-.52	.17	.074	-1.06	2.04E-02

*. 平均の差は .05 で有意

表 10- 4　子育て負担感の多重比較

従属変数: 子育て負担感
Bonferroni

(I) 対象	(J) 対象	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間 下限	95% 信頼区間 上限
28-37歳・男性・子なし	28-37歳・女性・子なし	.85*	.20	.001	.22	1.48
	38-47歳・男性・子なし	-.42	.25	1.000	-1.20	.37
	38-47歳・女性・子なし	9.99E-02	.28	1.000	-.77	.97
	28-37歳・男性・子あり	-1.17*	.18	.000	-1.74	-.61
	28-37歳・女性・子あり	-1.E-01	.16	1.000	-.61	.41
	38-47歳・男性・子あり	-1.46*	.16	.000	-1.97	-.95
	38-47歳・女性・子あり	-.48	.16	.062	-.97	9.98E-03
28-37歳・女性・子なし	28-37歳・男性・子なし	-.85*	.20	.001	-1.48	-.22
	38-47歳・男性・子なし	-1.27*	.26	.000	-2.08	-.45
	38-47歳・女性・子なし	-.75	.29	.262	-1.65	.15
	28-37歳・男性・子あり	-2.02*	.20	.000	-2.63	-1.41
	28-37歳・女性・子あり	-.95*	.18	.000	-1.51	-.40
	38-47歳・男性・子あり	-2.31*	.18	.000	-2.87	-1.75
	38-47歳・女性・子あり	-1.33*	.17	.000	-1.87	-.79
38-47歳・男性・子なし	28-37歳・男性・子なし	.42	.25	1.000	-.37	1.20
	28-37歳・女性・子なし	1.27*	.26	.000	.45	2.08
	38-47歳・女性・子なし	.52	.32	1.000	-.50	1.53
	28-37歳・男性・子あり	-.76	.25	.058	-1.53	1.05E-02
	28-37歳・女性・子あり	.32	.23	1.000	-.41	1.04
	38-47歳・男性・子あり	-1.04*	.23	.000	-1.77	-.31
	38-47歳・女性・子あり	-6.E-02	.23	1.000	-.77	.65
38-47歳・女性・子なし	28-37歳・男性・子なし	-1.E-01	.28	1.000	-.97	.77
	28-37歳・女性・子なし	.75	.29	.262	-.15	1.65
	38-47歳・男性・子なし	-.52	.32	1.000	-1.53	.50
	28-37歳・男性・子あり	-1.27*	.28	.000	-2.13	-.41
	28-37歳・女性・子あり	-.20	.26	1.000	-1.02	.62
	38-47歳・男性・子あり	-1.56*	.26	.000	-2.38	-.73
	38-47歳・女性・子あり	-.58	.26	.728	-1.39	.23
28-37歳・男性・子あり	28-37歳・男性・子なし	1.17*	.18	.000	.61	1.74
	28-37歳・女性・子なし	2.02*	.20	.000	1.41	2.63
	38-47歳・男性・子なし	.76	.25	.058	-1.E-02	1.53
	38-47歳・女性・子なし	1.27*	.28	.000	.41	2.13
	28-37歳・女性・子あり	1.07*	.16	.000	.59	1.56
	38-47歳・男性・子あり	-.28	.16	1.000	-.77	.21
	38-47歳・女性・子あり	.70*	.15	.000	.23	1.16
28-37歳・女性・子あり	28-37歳・男性・子なし	9.99E-02	.16	1.000	-.41	.61
	28-37歳・女性・子なし	.95*	.18	.000	.40	1.51
	38-47歳・男性・子なし	-.32	.23	1.000	-1.04	.41
	38-47歳・女性・子なし	.20	.26	1.000	-.62	1.02
	28-37歳・男性・子あり	-1.07*	.16	.000	-1.56	-.59
	38-47歳・男性・子あり	-1.36*	.13	.000	-1.78	-.94
	38-47歳・女性・子あり	-.38	.12	.069	-.77	1.18E-02
38-47歳・男性・子あり	28-37歳・男性・子なし	1.46*	.16	.000	.95	1.97
	28-37歳・女性・子なし	2.31*	.18	.000	1.75	2.87
	38-47歳・男性・子なし	1.04*	.23	.000	.31	1.77
	38-47歳・女性・子なし	1.56*	.26	.000	.73	2.38
	28-37歳・男性・子あり	.28	.16	1.000	-.21	.77
	28-37歳・女性・子あり	1.36*	.13	.000	.94	1.78
	38-47歳・女性・子あり	.98*	.13	.000	.58	1.38
38-47歳・女性・子あり	28-37歳・男性・子なし	.48	.16	.062	-1.E-02	.97
	28-37歳・女性・子なし	1.33*	.17	.000	.79	1.87
	38-47歳・男性・子なし	6.09E-02	.23	1.000	-.65	.77
	38-47歳・女性・子なし	.58	.26	.728	-.23	1.39
	28-37歳・男性・子あり	-.70*	.15	.000	-1.16	-.23
	28-37歳・女性・子あり	.38	.12	.069	-1.E-02	.77
	38-47歳・男性・子あり	-.98*	.13	.000	-1.38	-.58

*. 平均の差は .05 で有意

表 10- 5　子育て孤立感の多重比較

従属変数: 子育て孤立感
Bonferroni

(I) 対象	(J) 対象	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間 下限	95% 信頼区間 上限
28-37歳・男性・子なし	28-37歳・女性・子なし	1.94*	.20	.000	1.33	2.55
	38-47歳・男性・子なし	.11	.24	1.000	-.66	.87
	38-47歳・女性・子なし	1.65*	.27	.000	.80	2.50
	28-37歳・男性・子あり	-.95*	.18	.000	-1.50	-.40
	28-37歳・女性・子あり	1.18*	.16	.000	.69	1.68
	38-47歳・男性・子あり	-.71*	.16	.000	-1.21	-.21
	38-47歳・女性・子あり	.86*	.15	.000	.38	1.33
28-37歳・女性・子なし	28-37歳・男性・子なし	-1.94*	.20	.000	-2.55	-1.33
	38-47歳・男性・子なし	-1.83*	.25	.000	-2.63	-1.04
	38-47歳・女性・子なし	-.29	.28	1.000	-1.17	.59
	28-37歳・男性・子あり	-2.89*	.19	.000	-3.49	-2.30
	28-37歳・女性・子あり	-.76*	.17	.000	-1.30	-.22
	38-47歳・男性・子あり	-2.65*	.17	.000	-3.19	-2.10
	38-47歳・女性・子あり	-1.08*	.17	.000	-1.61	-.56
38-47歳・男性・子なし	28-37歳・男性・子なし	-.11	.24	1.000	-.87	.66
	28-37歳・女性・子なし	1.83*	.25	.000	1.04	2.63
	38-47歳・女性・子なし	1.54*	.32	.000	.55	2.53
	28-37歳・男性・子あり	-1.06*	.24	.000	-1.81	-.31
	28-37歳・女性・子あり	1.07*	.23	.000	.37	1.78
	38-47歳・男性・子あり	-.82*	.23	.010	-1.53	-.10
	38-47歳・女性・子あり	.75*	.22	.021	5.46E-02	1.45
38-47歳・女性・子なし	28-37歳・男性・子なし	-1.65*	.27	.000	-2.50	-.80
	28-37歳・女性・子なし	.29	.28	1.000	-.59	1.17
	38-47歳・男性・子なし	-1.54*	.32	.000	-2.53	-.55
	28-37歳・男性・子あり	-2.60*	.27	.000	-3.44	-1.77
	28-37歳・女性・子あり	-.47	.26	1.000	-1.27	.33
	38-47歳・男性・子あり	-2.36*	.26	.000	-3.16	-1.56
	38-47歳・女性・子あり	-.79*	.25	.047	-1.58	-5.E-03
28-37歳・男性・子あり	28-37歳・男性・子なし	.95*	.18	.000	.40	1.50
	28-37歳・女性・子なし	2.89*	.19	.000	2.30	3.49
	38-47歳・男性・子なし	1.06*	.24	.000	.31	1.81
	38-47歳・女性・子なし	2.60*	.27	.000	1.77	3.44
	28-37歳・女性・子あり	2.13*	.15	.000	1.66	2.61
	38-47歳・男性・子あり	.24	.15	1.000	-.23	.72
	38-47歳・女性・子あり	1.81*	.14	.000	1.36	2.26
28-37歳・女性・子あり	28-37歳・男性・子なし	-1.18*	.16	.000	-1.68	-.69
	28-37歳・女性・子なし	.76*	.17	.000	.22	1.30
	38-47歳・男性・子なし	-1.07*	.23	.000	-1.78	-.37
	38-47歳・女性・子なし	.47	.26	1.000	-.33	1.27
	28-37歳・男性・子あり	-2.13*	.15	.000	-2.61	-1.66
	38-47歳・男性・子あり	-1.89*	.13	.000	-2.30	-1.48
	38-47歳・女性・子あり	-.32	.12	.221	-.71	5.71E-02
38-47歳・男性・子あり	28-37歳・男性・子なし	.71*	.16	.000	.21	1.21
	28-37歳・女性・子なし	2.65*	.17	.000	2.10	3.19
	38-47歳・男性・子なし	.82*	.23	.010	.10	1.53
	38-47歳・女性・子なし	2.36*	.26	.000	1.56	3.16
	28-37歳・男性・子あり	-.24	.15	1.000	-.72	.23
	28-37歳・女性・子あり	1.89*	.13	.000	1.48	2.30
	38-47歳・女性・子あり	1.57*	.12	.000	1.18	1.95
38-47歳・女性・子あり	28-37歳・男性・子なし	-.86*	.15	.000	-1.33	-.38
	28-37歳・女性・子なし	1.08*	.17	.000	.56	1.61
	38-47歳・男性・子なし	-.75*	.22	.021	-1.45	-5.E-02
	38-47歳・女性・子なし	.79*	.25	.047	4.90E-03	1.58
	28-37歳・男性・子あり	-1.81*	.14	.000	-2.26	-1.36
	28-37歳・女性・子あり	.32	.12	.221	-6.E-02	.71
	38-47歳・男性・子あり	-1.57*	.12	.000	-1.95	-1.18

*. 平均の差は .05 で有意

（4）子育て感に影響する諸要因の違い

子育てプラス感、子育て負担感、子育て孤立感の程度差は、どのような要因の違いによるのだろうか。できるだけ、さまざまな要因の影響力を検討する。まず、性差、世代差、子どもの有無、配偶関係、世帯構成などの家族的要因、学歴、職業、年収などの階層的要因、性別役割分業意識、男性役割賛成意識、３歳児神話意識などの生活価値観、そして、生活満足度などである。有配偶者については、配偶者との関係に関わる要因も検討に加えることにする。

ここでは、子育てプラス感、子育て負担感、子育て孤立感の尺度として、因子分析の結果得られる因子得点を用いることにする。

すべての対象者について、子育て感に影響する諸要因の影響力を検討するために、重回帰分析のステップワイズ法により結果を求めることにした。

影響要因として用いた変数は、以下のとおりである。

・女性＝１，ダミー変数＝０，
・　大都市＝１，ダミー変数＝０，・町村＝１，ダミー変数＝０，
・　高校＝１，ダミー変数＝０，・短大・高専＝１，ダミー変数＝０，
・　大学・院＝１，ダミー変数＝０，・核家族＝１，ダミー変数＝０，
・　三世代＝１，ダミー変数＝０，・無職＝１，ダミー変数＝０，
・　有配偶＝１，ダミー変数＝０，・子ども無＝１，ダミー変数＝０，
・年収 400 万円未満＝１，ダミー変数＝０，
・　年収 700 万円未満＝１，ダミー変数＝０，・年収 700 万円以上＝１，ダミー変数＝０，
・　性別役割分業賛成＝１，ダミー変数＝０，・３歳児神話賛成＝１，ダミー変数＝０，
・　男性役割賛成＝１，ダミー変数＝０，・家計不満足＝１，ダミー変数＝０，
・　健康不満足＝１，ダミー変数＝０，・生活不満足＝１，ダミー変数＝０，
・　家計 400 万円未満＝１，ダミー変数＝０，・家計 700 万円未満＝１，ダミー変数＝０，
・　家計 1000 万円未満＝１，ダミー変数＝０，
・　配偶者傾聴不満足＝１，ダミー変数＝０，・配偶者評価不満足＝１，ダミー変数＝０，
・　配偶者アドバイス不満足＝１，ダミー変数＝０，
・　配偶者との性関係不満足＝１，ダミー変数＝０，
・　夫婦関係不満足＝１，ダミー変数＝０，
・　配偶者とのトラブルあった＝１，ダミー変数＝０，

子育て感を従属変数とする重回帰分析の結果は、表 10-6 から表 10-8 である。

表 10-6 によると、子育てプラス感に対して、子どもなし、生活不満足感、健康不満足感が逆の影響を及ぼし、女性であること、男性役割賛成意識、３歳児神話賛成意識、若年層、